

フレーベルにおける遊びとカテゴリー陶冶

著者	正木 義晴
雑誌名	東京家政大学研究紀要 1 人文社会科学
巻	33
ページ	89-95
発行年	1993
出版者	東京家政大学
URL	http://id.nii.ac.jp/1653/00008869/

フレーベルにおける遊びとカテゴリー-陶冶

正木 義晴

(平成4年10月1日受理)

Das Spiel und die Kategorialen Bildung bei Fröbel

Yoshiharu MASAKI

(Received October 1, 1992)

1

『母の歌と愛撫の歌』の序において、フレーベルは次のようにいっていた。Gar hoher Sinn liegt oft im kind'schen Spiel“ (無邪気な遊びのなかに、しばしばより高度な意味が存在する)。

人間形成における遊びの重要性を説くもの、遊びの本質や人間学的意味を考察しているものは数々あるが、子どもの遊びの陶冶価値を十分な意味で説明していったことはフレーベルの教育学の歴史にとっての偉大なそして決して失われることのない業績の一つであろう。そして、更に重要で注目し値いすることは、彼の遊びの理論と実践のなかで、彼の教育学の構築において見いだされた諸原理、諸原則、諸概念がそれぞれその最も美しい固有の場を得、その最も美しい自己実現を見、集大成的な意味でフレーベル教育学の核心部分になりえているということである。従って、我々は、ここで理論の核心に出会うことになろう。

フレーベルの陶冶理論において最も深い意義を有するのが、「生の合一」Lebenseinigungといった原理である。まず、「生の合一」について考察してみよう。

この概念は、フレーベルのローマン主義的・万有在神論的世界観から演繹された形而上学的根本概念であり、いわゆる「球体の法則」に基づくものである。もちろん、これは自然科学の意味で解されるべきものではない。すべてを貫く唯一の統一的生の連関、生を基礎づけている、万物に作用する永遠の統一として、他の可能な諸法則と並ぶ法則ではなく、永遠の法則である。これによると、すべての生は合一である。そして、ノヴァーリスが根源教職教養科 道徳教育研究室

的同一性から自然と精神とを外界と内界との関係から把握したように、フレーベルは「生の合一」を「内的なもの」と「外的なもの」との関係から世界解釈したのである。「内的なもの」は内界としての神的法則を意味する「精神的なもの」であり、そして「外的なもの」はその内界の必然的に外化されたそのものの感性的に把握可能な外界である。しかも、フレーベルによれば、「内的なもの」は静止的な核ではない。その実体は精神的な力なのである。この点は、ヘルダーの歴史哲学の原理と一致している。実体としての力は、常に統一から自己活動的に多面的に作用する。従って、そこから多様性と個別性が生ずるのである。

それとともに、「内的なもの」と「外的なもの」との関係は、一般的なものの特異なもの、普遍的なものとの個別のものとの関係として定立される。フレーベルは次のように主張している。「球体的なものは、一般的なものの特異なもの、普遍的なものとの個別のもの、統一と同時に個別性である」¹⁾。そして、外的なものにそれに関連している精神的なものとの関係-特異なものとの普遍的なものとの関係は、フレーベルによって「象徴的」と特色づけられている。それ故次のようにいうのである。「まず、自然現象として我々を困むすべてのもの、また次に人間の精神、心情、生命から生じるすべてのものは、象徴的な意味をもつ」²⁾と。即ち、現実的なもの、特異なもの、個別のものは、可視的で感性的に把握可能なその外的な側面を越え、それに現われる普遍的なもの、内的なもの、神的なものを暗に示しているのである。

では、このような原理は、陶冶理論にとって何を意味するのであろうか。教育問題への移行を決定づけているのが次の命題である。「万物の使命及び職分は、そのも

のの本質、従ってそのものに内在する神的なもの、神的なものそれ自体を、発展させながら、表現すること……である³⁾」。自己の本質の実現、神性を可視的な世界に現実化すること、要するに広義での表現が万物の課題であり、その際に自己の本質の実現は更に同時により広い連関に持ち込まれるのである。即ち、この実現によって、神性そのものの実現、神性一般の展開をみるのである。

人間の課題、人間の使命も、こうした連関に持ち込まれている。だが、人間が他の存在と異なるのは彼の「意識」である。それ故に、他の存在が無意識的に行なうことを、自己自身で十分な意識、自覚をもって行なわねばならない。これが人間の課題となっている。そして、ここから教育の課題が規定される。「意識し、思惟し、認識する存在である人間を刺激し、指導して、その内的な法則を、その神的なものを、意識的に、また自己の決定をもって、純粹かつ完全に表現させるようにすること、及びそのための方法や手段を提示すること、これが人間の教育である」⁴⁾。

人間の課題、さらには教育の課題は、フレーベルによって、「内界」と「外界」の関係についての形而上学的端緒と結合されることによって、次の定式にまとめられる。「内的なものを外的なものに、外的なものを内的なものにすること、両者のために統一を見出すこと、これが人間の使命が主張される一般的な外的形式である」⁵⁾。こうして、人間の課題は、今や二重の課題として規定されるのである。一方は、「内的なものを外的なものにすること」、すなわち、自己自身、自己の本質を可視的な形象において実現することであり、これは他のすべての存在と共通の課題である。他方は、この課題と結びつき「外的なものを内的なものにすること」、即ち外界に見いだすものすべてを内面的に体得、理解するといった課題であり、意識的存在、自覚的存在としての人間にとって特に要請される特別な課題である。

こうした二重の課題は、その実のり豊かな真理性にもかかわらず、フレーベルの遊びの理論や教育実践において十分に展開されていないように思われる。我々は、これをどのように考えたらよいのであろうか、フレーベルの形而上学的世界観からすれば、二つの課題は相互に相違する課題、自立的で単に結合されている課題ではありえない、むしろ弁証法的に組み合わせた課題である。クラフキーによれば、両者は「統一的な出来事二つの側面又は局面であり、陶冶の出来事そのもの」⁶⁾なのであ

る。なぜならば、フレーベルによれば、内的なもの、つまり外的にされるものは、その本質上以前に内的にされた外的なものであるし、しかし、また逆に、内的にされるべき外的なものは本質的に内的なもの自身であるし、ただ外的なものこの本質的な内的なもののみが人間によって再び内的にされるからである。従って、我々が一般的に主体から客体へそして客体から主体への弁証法的運動として理解可能な、内的なものから外的なものへそして外的なものから内的なものへの両運動は、決してアンチノミーに陥入らないのである。それは、フレーベルによれば、最初から彼の一元論的な世界観に基礎づけられているのである。

では、フレーベルの主張する「生の合一」はどのようにして達成されるのであろうか。統一的な出来事としての陶冶には二つの契機がお互いに入っており、その弁証法的な運動の過程が「生の合一」を生み出すのである。そして、これが人間の使命であり、同時に教育目標である。両契機とは、もちろん「内的なもの」と「外的なもの」である。だが、こうした区分は、実際、単なる外見的なものにすぎない。一元論の立場からすれば、相互に入りうるものは、内的なもの、人間の精神的なもの、そして外的なもの内的なものだからである。それにもかかわらず、人間、法則、秩序も外界として現われ、かつ、このようなものとして現象しうる。「生の合一」とは、従ってクラフキーのいうように次のことを意味するのである。「人間が内的なものをおりにふれて外的に現われるものから解放し、そして自家業ろう中のものにする」⁷⁾ こと。しかし、人間はそれ自身純粋な内的なものでもないし、また外的なものでもあろう。それ故、「生の合一」の過程は次の場合に真に実現可能となろう。即ち、人間において、外的なもの内的なものを自由に利用できるものにしそしてそれが再び同時に外的にされる場合に、換言すれば、人間が内面化されたものを表現、言語、仕事などで生かす場合に、である。

2

フレーベルにとって、「生の合一」は人間の使命であるとともに、教育目標であった。だが、人間の使命が自己の本質の実現であると主張される場合に、それは同時により広い連関に持ち込まれているのである。つまり、人間は外的な表現を通じて自己の内的なものを実現するとともに、この実現において同時に神性一般を展開する

のである。このように考えるならば、最終的な全体的合一と部分的な合一との関係が問題となろう。これについてはフレーベルは次のように主張するのである。生の合一、陶冶は遠い教育目標であるばかりではない。より小さな広がりをもつ生の合一の結果としてのみ達成可能であるし、こうした部分的な合一においてのみ、いつもより一層の現実性を獲得するのであると、それ故に、生の合一は、同時に教育的な身近な目標になり、そして全く具体的な教育活動の直接の指導像となるのである。

では、「生の合一」は何においてそしていかなる仕方において実現されるのであろうか。教育学的にみるならば、フレーベルによれば、人間の自己自身との、同胞との、人類との関係において、人間の自然との関係、更には人間の神との関係においてであり、そしてその仕方は、幼年時代では、家庭における人間的な根源体験と何よりも遊びにおいてである。前者については、フレーベルは宗教的・倫理的教育のために、ペスタロッチと同様に、家庭における信頼と愛に支えられた家族関係での根源体験のカテゴリーの意味を解明しそしてそれを強調しているといった点を指摘するだけにとどめよう。

では、フレーベルにとって「遊び」Spielとは何であったのか。それは子どもの特殊な生の形式であるとともに、子どもの陶冶形式なのである。それ故に、子どもの「遊び」の陶冶可能性を解放することが、幼年期における最も重要な課題となるのである。

そしてフレーベルが「生の合一」を「遊び」という仕方において実現するものと把握した場合に、それは次の二つのことを意味しているのである。

(1) 子どもの遊びも、自我と対象、主体と容体、人間と世界との間の緊張関係のなかで行なわれる。

フレーベルの概念でいえば、「内的なもの」と「外的なもの」との関係について生ずるということである。従って、フレーベルのいう「遊び」を人間に内在する自然的な衝撃やエネルギーの表現であるとか、諸能力の表現であるとか規定してはならないのである。それは、クラフキーの主張しているように、「精神的生の初期形式」⁹⁾ Frühform geistigen Lebensであり、そしてそのなかでは意味関係の充実をめざす世界と生との真の出会いが生じるのである。

フレーベルの「遊び」の概念規定も、確かに、長年の教育実践や理論の深化の過程で、多様に変化している。彼の主著である『人間の教育』1826年では「遊び

とは、すでにその言葉自身も示しているように、内的なもの自由な表現、即ち内的なものそのものの必要と要求に基づくところの、内的なものの表現にほかならない」⁹⁾と述べられているように、「遊び」はいわば機能的なものであり、その意味が主観的な側面、即ち能力発展から把握されている。だが、こうした意義把握も、1835年以後の著作では、確かに変っている。例えば、フレーベルは『幼稚園の作業道具についての全体にわたる書簡式の説明』1850年において次のように主張しているのである。「遊び」において、「子どもは、……自己自身を通じて彼の生、彼の最も内的で、彼自身にいまだに知られていない無意識的な生を表現するのであり、そして周囲の全生活、その生活の内的なものと最も内的なものを自己のなかに受容し、それをいわば自己のうちに映し、両者の生の範囲を比較し、それらの共通性、同一性、一致点を見つけるのであり、そしてこうして自分自身を真実で全面的かつ内的な生の合一へ……発展させ、教育し、陶冶する」と¹⁰⁾。「遊び」の理論の発展、深化と体系化にとまない、従来強調されてきた「内的なものの表現」といった課題に、外界とその合法則性の把握という課題が加わり、ここで「遊び」の本質が明確に「内的なもの」と「外的なもの」との間の連関に基づいていることが示されるのである。そして、この考え方が恩物の根本思想となる。

(2) 子どもの遊びによって展開される世界と大人の世界とは相違しているが、両者はその根底では連続している。

子どもが遊びによって体験し、解明しそしてつくりあげている精神的な世界は、確かに固有のものであり、大人が思惟や悟性によって創造された精神的な世界とは異っている。だが、両者はその最も奥底で統一されているのである。フレーベルは次のように主張している。「遊びは、子どもに外界において内界を、物体界において力の世界を、精神界を感じさせかつ予感させる」¹¹⁾と、確かに、子どもは対象、世界と漠然とした仕方ではしか関係することができない。それらを悟性による仕方では概念的に認識しえない。しかし、子どもはその代わりに情感的な仕方では「予感」Ahnungによって対象、世界の深い精神的意味内容を獲得しうるのである。つまり、子どもは、遊びのなかで予感を媒介として大人の精神界の法則や経験を先取りするのである。

他方では、子ども時代の遊びの世界は、真に統一された大人の世界で止場される。「人間が高められた意識をもって彼の生の昔の最初の出発点へと一いわば彼の予感のなかに一しばしば回帰することによって、人間はその予感において、本来的かつ真に自己自身を獲得する」¹²⁾。

3

「生の合一」とは、そこにおいて外的なものが内的にされそして同時に内的なものが外的にされる出来事であった。しかし、フレーベルによれば、こうした合一は、直接には可能ではない。両側面が合一へと進むための「媒介」Vermittlungが必要なのである。そして、それを可能にするのが「媒介物」である。かくして、フレーベルの陶冶理論において、「媒介」という原理が第二の重要な意義をもってくる。

我々は「媒介」の本質を理解するために、人間の自己認識と自己形態化といった様式の例を示そう。我々人間は、ディルタイが主張しているように、自分の内省によって、自己の内部への直接的洞察によって自己自身を知るわけではない。「人間が真に自己を認識しようとするならば、彼は自己を自己の外に表現しなければならないし、いわば自己を自己に対立させなければならない」¹³⁾。そして、ここから外的に対立するもの、表現の受容において自己自身が認識されるのである。これは、分離と再合一の弁証法的な関係である。こうした考え方から、「劳作」や「美的表現の形態化」がフレーベルの教育学において重要な意味をもってくるのである。

だが、フレーベルによれば、媒介に関与しうるのはこれらのみではない。人間と自然との関係においては「直観数学」と「言語」、更に「人間生活と宗教との純粋な関係」がその役割をもっているのである。そして、フレーベルは、これらの媒介のための諸様式が根源的に人間陶冶の初期形式である遊びに結合されていると認めるのである。かくして、「遊び」が「生の合一」のための「媒介」の中心的位置を占めるのである。

前述の如く、媒介は、それが行なわれるためには、常に媒介するもの、媒介物を必要とした。媒介物が客観的なもの、対象的なもの、「直観的なもの」でなければならないというフレーベルの洞察は、実り豊かなことであろう。人間の精神は、内的なもの、生の法則、世界の法則を、その客観性において経験される感性的に把握でき

るものにおいてのみ、とらえるのである。フレーベルは次のようにいっている。「一時的で目に見えるものは、ただ媒介によってのみ、それ自身で永続的に統一しているもの、及び目に見えないものを対象化し、目に見えるものにするのができ、従っていわば内的なもの、精神的なもの、制約するものの解放と直観へ導くことができる」¹⁴⁾。こうした意味で、媒介的なものであるということが「遊び対象」の本来的意味として明らかにされるのである。

「生の合一」と「媒介」は二重の、だがそのもっとも根底で統一的な運動を内包している。この運動を、フレーベルは「内的なものを外的にするそして外的なものを内的にする」と規定したのであった。我々は、このことをすでにみてきた。そしてこうした二重の統一運動の連関を彼の「遊び」理論において十分に見出すことができる。

子どもが自己を表現し、描写することによって世界が解明されていく。では、こうした表現や描写はどのようにして生ずるのであろうか。それは先取りする予感によってである。即ち、子どもの固有の本質や彼のまだ未知の本質が所属しているところの世界、そうした世界の有意味性が彼によって予感されることによってである。「子どもは、いっさいの事物を材料として取り扱い、その材料において、またその材料を通じて自分のなかに存在しているものを外に表現する」¹⁵⁾。今や、「遊び」を介して「世界」は「遊び」の対象物によって表現される。そこで、フレーベルによれば、「遊びながら発達する子どもと、その遊びの材料との内的な相互関係」¹⁶⁾が発展していく。ここに「遊び」の重要な陶冶価値が存在するのである。

こうした相互関係の具体的な例は、第一恩物、ボールの遊びについての展開において明確に示されている。「小さなボールが軽く動いたり、運動したり、行ったり、走ったり、ころがったりするように、我々はまもなくそのボールで遊び子どもも動いたり、運動したりするのを見る。つまり、子どもにも行ったり、走ったりする欲望が現われてくる」¹⁷⁾。子どもにとって、否、子ども自身にとって、ボールは自己を表現することによって自分の能力を訓練したり、増進したり、認識したりする手段であるばかりではない。「子どもをとりまくすべての環境の本質的な特性や現象や関係が、ボールにおいて、またボールを通じて現われてくる」¹⁸⁾。それらは、材料、

形式や形態、大きさ、運動と静止、空間関係、時間関係、光の現象、色彩などのカテゴリー的なものである。それ故に、フレーベルは次のように主張するのである。ボール遊びは、「子どもの自己の内界の表現手段としての、また子どもの外界及び環境の理解の手段及び認識の手段」¹⁹⁾であると。

4

「遊び」は、前述のように、フレーベルによれば、人間陶冶の初期形式であった。では、これはいかなる性格を有するものであろうか。世界とその意味内容についての子どもと大人の関係の相違性、認識といった次元の世界の把握の仕方についての子どもと大人の相違性から考察してみよう。

まず、フレーベルはそれを前者の全体性、後者の区分性においてみているのである。子どもの「作業衝動」は行動、感情、思考が三位一体的な創造活動であるし、また子どもにおいては直観と言語、感情と思考、意欲と行為、身体と心がまだ区分のない統一を形成している。確かに、子どものこの時期の教育はこうした認識を基礎として行われねばならない。そして、これに相応すると、子どもにとって、その世界像は決してまだ区分のない、区分の知らない全体性として現われてくるのである。ところで、生と陶冶の過程は、常に進行する区分化へと導く。しかし、全体性と区分性は、いわば弁証法的な関係をもっている。それ故に、区分化への過程において、人的生の統一をいかに保持するかということが、より大なる「生の合一」の課題となるのである。

そして、フレーベルは、この区分性への過程と、同時に合一への過程の第一の局面が「遊び」において成立しているとみることによって、これをカテゴリー陶冶の出来事として認識した。彼は次のように主張している。「私が、……私の子どもたちの遊びと作業様式によって道を開こうとしたものは、まさに人間が彼の自己の内界によってそして彼の生活の経験によって予感そして認識にまで、明確な意識にまで至るということである。これが、最も内面的な生活の認識に対してと同様に、最も高度な生活の要求に対して、すべての人間の生活のなかでくり返される普遍妥当的な生活経験と主張を与える」²⁰⁾と。

フレーベルが陶冶をカテゴリー的なものであると把握しているということ、そして彼が「遊び」においていか

にカテゴリー陶冶を志向していたかということを詳細に知るためには、我々は「恩物」理論についての考え方をみればよいであろう。フレーベルは、子どもの第二恩物、球と立方体の導入について次のようにいっている。球や立方体、そしてこれらによって表現されるものは、「ただ単に規範のみを、即ち規範的、基本的、模範的な直観や提示²¹⁾」を与える。「何か規範的なものが、いわば結合し、比較するところの尺度として自己の外に与えられているということは、人間にとって大へん重要なことである」²²⁾。我々は、おのおのの個別的なもの、特殊なものを、そのあらゆる関係において把握することはできないし、あらゆるものを多面的に直観したり、調整したりすることはできない。「人間があらゆる特殊なもの、個別的なものに対して、一般的なもの及び統一を認識し、次に一つのものから他のものを推論する」²³⁾ことが可能であるためには「規範的なもの、基本的なもの、模範的なもの」を習得することが重要なのである。ここでもってフレーベルは次のように主張したのである。「もし人間がたとえわずか一つのものでも完全にそれに徹し、そしてこれを把握するならば、彼はそれによって同時にまた他のあらゆるものを根本的に理解することができるようになるであろう」²⁴⁾と。

ここで、我々は陶冶のカテゴリー的性質に関してフリットナーがいていることを思い出すべきであろう。「陶冶は、精神が実りを結ぶ点で獲得されそして次に十分な応用を許す根本経験と態度様式を所有することに存する。そこで、この理解されそして出来上った所有から、陶冶された人間が自己を方向づけることができそして新しいものも既知のものも援助でもって同化できるのである。真の陶冶の生命性は、それに基づいているのである」²⁵⁾。

5

人間陶冶の初期形式としての「遊び」のカテゴリー的性質を明確にするためには、我々は次にフレーベルの「直観」についての考え方を参照してみよう。

周知のように、直観がすべての認識の絶対的な基礎であり、この承認がすべての人間陶冶の真の基礎であると、主張したのはペスタロッチである。こうした思想はフレーベルの教育学にとっても基本的なものである。だが、フレーベルの直観概念は最初から単なる感性的な受容以上のものであり、活動主義的な意味を有するものである。フレーベルは直観の活動形式を「行為直観」Tat-ansch-

auungと名づけている。その理由は、彼がここに子どもと事物との行為的な交際にふさわしい意味、そして表現行為において、世界認識のための、自己認識のための、子どもの自己との行為的な交際にふさわしい意味を認識していたからである。

ところで、前述のように、内的なものを外的にし、同時に外的なものを内的にし、そしてこうした二重の側面の過程が目標である「生の合一」を形成するとみてきた。フレーベルによれば、「行為直観」はこのような過程を媒介する具体的な形式なのである。かくして、直観が陶冶手段であると同時に陶冶目標になるのである。そして、「行為直観」とはクラフキー的にみれば、カテゴリー直観であることが理解できる。フレーベルは、恩物体系の独創的な意義をこの認識に基づいて次のようにいっている。認識や知識の出発点は行為である。行為によって真の人間の教育が始まる。言葉だけでは得られにくい直観、認識、洞察は、実物や行為によって簡単にしかも明瞭に得られるものである。「これら（第5恩物）の遊び方や作業の方法と手段の偉大さや稀有さ、及び活気に満ちた生々とした有効さは次の点にある。即ち、言葉や概念によっては、ただ別々にしかも漸次的に与えられるにすぎない直観や概念や洞察が、自己完結している一個の唯一の実物表現や形態によって、たちまち一つのもの、それ自身で統一したものとして得られるということである」²⁰⁾。その際に、ベスタロッチが直観の構成要素として言葉の役割を重要視していたと同様に、フレーベルもその意義を無視しているわけではない。彼はいっている。「しかし、言葉、それも分節して結合された言葉、即ちリズムカルな言葉によってそうした直観や認識をなおいっそう十分に補充し、そしてより完全なものに高めることができる。たとえいかに言葉の才にたけた人間であっても、言葉を同時に直観に結合するならば、そうした直観はすべて、より意識的なものになり、彼をより高い意識に導く」²¹⁾。

そして、フレーベルに従えば、このような恩物によって獲得される、「行為直観」から発展したカテゴリー直観は二重の、しかもその核において統一的作用をもっているものであり、「子どもにとって、外界を開くための鍵であり、彼の内界の覚醒者」²²⁾となるのである。では、外界の解明はいかにして生じるのであろうか。「特殊なものなかにますます多く一般的なものを、……最も特殊なものなかに最も一般的なものを……そし

て同様に個々のもの、最も個別なものなかに統一を……多種多様なものなかに単一で統一のものを認識させたり、理解させたり、表現させたりする」²³⁾ ことによってである。これに対して子どもの内界の覚醒や発展はどのようにして生じるのであろうか。「一般的なものをある特殊なものとして……内的なもののある外的なものとして……感じられたもの、考えられたものを一個の形あるものとして……そして単数性のある多数性として、単一なものを一つの多様なものとして……こうして見えないものを見えるものにおいて知覚し直観しうようにする」²⁴⁾ ことによってであると。

6. 結 語

子どもにとって「遊び」が重要な意味をもつ、といった主張を否定するものはいないであろう。しかし、その意味の規定となるとかなり困難な仕事になろう。というのは、遊びといった生の現象形式は包括的、多面的であり、その意味付与は多様な観点、側面からなされるものだからである。

初めてその十分な意味で教育的観点から遊びを考察し、そして遊びの理論を展開したのはフレーベルであった。この観点はその後久しく忘れ去られた。グロース (K. Groos)、スペンサー (H. Spencer)、ホール (G.S. Hall)、シュテルン (W. Stern)、ビューラー (K. Bühler)、バイテンディーク (F.J.J. Buytendijk) などによる心理学的そして生物学的考察方法が、またホイジンガ (J. Huizinga) による文化人類学的考察方法が今日まで広くその分野で支配している。確かに、このような観点からのあそびの理論は実り豊かなものとなっていく。だが、これらは教育学にとって何をもたらすのか。非教育学的な観点からのあそびの理論は、教育学にとって補助的な役割をもつにすぎないのではないか。

教育学的な遊び理論の問題は、モンテッソーリの教育学の出現によって再び前景にあらわれた。そして、この問題はそれ以後「フレーベルか又はモンテッソーリか」といった問題をひきおこした。フレーベル教育学の象徴主義、形而上学的前提、一面的に幾何学に基礎づけられた恩物体系の形式主義は批判の対象となろう。だがそれ以上に、モンテッソーリの教育学も批判されるべきであろう。なぜなら、そこでは、遊びや空想が敵視されているし、子どもの行為が一面的に自然主義的に解釈されているし、自己陶冶の手段として孤立化した感覚訓練や生

活訓練があまりに強調されているし、そして子どもの個別化を強調するために成人との交渉が遮断されているからである。モンテッソーリの教育学は、何よりもその基礎を医学や実証主義の心理学においているし、教育目標は現実適応主義、功利主義的であり、そしてその根底にはクラフキーのいう「機能的陶冶理論」が見い出される。これは陶冶理論の一つの契機にすぎない。そこで、モンテッソーリの教育学への批判は、我々をフレーベル教育学への新しい吟味、否、フレーベルのルネッサンスへと導びくのである。

では、フレーベルのルネッサンスはいかにして可能であろうか。そうした観点は何であろうか。それはクラフキーの主張したカテゴリー陶冶であろう。

フレーベルは遊びを心理学的な観点から解しているわけではない。生物学的な観点、文化人類学的な観点から解しているわけではない。彼は前述のように、教育学的な観点から考察しているのである。

形而上学的で、演繹的な世界解釈とはいえ、フレーベルにとって遊びはドイツの精神文化を背景にもつドイツ固有の実り豊かな概念である陶冶の基本的な出来事である。

「内的なものを外的にしてそして外的なものを内的にする」といった課題のもとで、フレーベルは教育目標として「生の合一」をあげているが、ここでは陶冶の主観的契機と客観的契機の弁証法的止場が明確にされている。ところで「生の合一」は媒介を必要とするが、これに関与可能なものは労作、表現、数学、言語、人間的宗教的な関係などであるが、これらの媒介形式の基礎をなしている根源形式は子どもの遊びなのである。

こうした観点からフレーベルは恩物体系の構成に着手しているが、では、遊びという根源形式が世界（現実）と子どもとの関係において何を基盤としていたのであろうか。それは、活動主義的な見地からの「行為直観」であり、これが子どもにとって現実の解明と同時に、現実にとっての子どもの解明といった二側面の解明が可能であるところのカテゴリー直観なのである。

引用文献

1), Friedrich : Fröbel : Friedrich Frobel's gesammelte pädagogische Schriften, von Wich-

ard Lange, 1862. I S.263.

2), Friedrich Fröbel : Ausgewählte Schriften, von Erika Hoffmann, 1951. I S.96.

3), Ausgewählte Schriften. 1951. II S.7.

4), ditto, S.8.

5), ditto, S.32.

6), Wolfgang Klafki ; Das pädagogische Problem des Elementaren und did Theorie der Kategorialen Bildung, Beltz, 1959. S.91.

7), ditto, S.91.

8), ditto, S.92.

9), Ausgewählte Schriften, II S.36.

10), Friedrich Frobel's gesammelte pädagogische Schriften, 1862. II S.582.

11), フリードリッヒ、フレーベル、岩崎次男訳『幼児教育論』明治図書 58ページ

12), Ausgewählte Schriften, I S.96.

13), Ausgewählte Schriften, II S.57.

14), Friedrich Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, II S.582.

15), Friedrich Frobel's gesammelte pädagogische Schriften, III S.580.

16), ditto, S.582.

17), ditto, S.563.

18), ditto, S.185.

19), ditto, S.185.

20), ditto, S.36.

21), ditto, S.72.

22), ditto, S.72.

23), ditto, S.72.

24), ditto, S.72.

25), Wilhelm Flitner : Allgemeine Pädagogik, Stuttgart 1951, S.133.

26), Friedrich Frobel's gesammelte pädagogische Schriften, III S.158.

27), ditto, S.158.

28), ditto, S.91.

29), ditto, S.91.

30), ditto, S.91.